

中1国語①

氏名

月 日

5問

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(山猫から裁判の手伝いを頼まれた一郎は、山を訪れた。)

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をききました。びっくりして屈んで見ますと、草のなかに、あっちにもこっちにも、黄金いろの円いものが、ぴかぴかひかっているのです。よくみると、みんなそれは赤いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利かないようでした。わあわあわあわあ、みんななにか言っているのです。

「あ、来たな。蟻のようにやってくる。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日はそこが日当りがいいから、そここの草を刈れ。」山猫は巻たばこを投げすてて、大いそぎで馬車別当にいつけました。馬車別当もたいへんあわてて、腰から大きな鎌をとりだして、ざっくざっくと、山猫の前とこの草を刈りました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、ぎらぎらひかっつて、飛び出して、わあわあわあわあ言いました。

馬車別当が、^①こんどは鈴をがらんがらんがらんと振りました。音はかやの森に、がらんがらんがらんとひびき、黄金のどんぐりどもは、すこししずかになりました。見ると山猫は、もういつか、黒い長い縹子の服を着て、もったいらしく、どんぐりどもの前にすわっていました。^②まるで奈良のだいぶつさまにさんけいするみんなの絵のようだと一郎はおもいました。別当がこんどは、革鞭を二三べん、ひゅうぱちつ、ひゅう、ぱちつと鳴らしました。

空が青くすみわたり、どんぐりはぴかぴかしてじつにきれいでした。「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減になかなおりをしたらどう

だ。」山猫が、すこし心配そうに、それでもむりに威張って言いますと、どんぐりどもは口々に叫びました。

「いいえ、だめです、なんといったって頭のとがっているのがいちはんえらいんです。そしてわたしがいちはんとがっています。」
「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちはんまるいのはわたしです。」

「大きなことだよ。大きなのがいちはんえらいんだよ。わたしがいちはん大きいからわたしがえらいんだよ。」

「そうでないよ。わたしのほうがよほど大きいと、きのうも判事さんがおっしゃったじゃないか。」

「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」

「押しっこのえらいひとだよ。押しっこのしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがやがや言って、なにがなんだか、まるで蜂の巣をつついたようで、わけがわからなくなりました。そこで山猫が叫びました。

「やかましい。ここをなんとこころえる。しずまれ、しずまれ。」

別当がむちをひゅうぱちつとならしましたのでどんぐりどもは、やつとしずまりました。

(宮沢賢治「どんぐりと山猫」による。一部表記の変更がある。)
(注) はぜる＝割れてはじける。

馬車別当＝馬車を操る御者のこと。
縹子＝布の織り方の一種。

